立命館学校教育研究会
秋季大会 2019　ご報告

2019 年 12 月 1 日（日）、立命館大学朱雀キャンパスにおいて、2019 年度立命館学校教育研究会 秋季大会が開催されました。校友教員の方をはじめとして、立命館大学の学生や大学院生、教育委員会関係者の方々など幅広い職種・年代、73 名の方にご参加いただきました。

全体会では、児玉敏男会長より、本大会開催にあたって挨拶をいただき、また本研究会の新しいリーフレットとロゴについての紹介がありました。次に、森田真樹事務局長（立命館大学大学院教職研究科副研究科長）より、立命館大学をめぐる近況について報告があり、最後に三田耕一郎委員（立命館大学衣笠教職支援センター主任）から 2019 年度に実施された教員採用試験の特徴や本学学生の受験結果等について報告がありました。

分科会では、今年度も学校現場において関心の高い 5 つのテーマを設定し、参加者各々が興味・関心のある分科会を選び、いずれの教室でも、講師の方を中心に熱心に議論が繰り広げられました。詳細については、以下にまとめておりますので、ご参照ください。

分科会終了後は、茶話会を開催し、来春からの着任予定者の紹介がなされ、講師の先生方や幅広い年代の参加者が親睦を深め、貴重な機会となりました。

第１分科会

「学校現場における ICT 活用 ～Society5.0 の時代を前にして～」

講師：木村 慶太 氏（立命館宇治中学校　教諭）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：友草 司 氏（学校法人立命館　附属校教育研究・研修センター長）

Ⅰ　超スマート社会（Society5.0 の時代)を生き抜くために、新学習指導要領ではプログラミング学習やアクティブラーニング等の推進が求められています。そのためには学習観の転換が必要で、知識を覚えることより、学習の楽しさに気づき自ら課題を解決することのできる「学習方法」を学ぶ事に多くの時間を充てる事となるでしょう。その

ためには、学習を効果的に実施するための情報環境を整える必要がありますが現状では遅れているようです。

Ⅱ　木村先生の実践例についての紹介

①　奈良県の小学校と立命館**守山**中学校とがコラボして**「デジタル紙芝居」**の作成に取組む実践例の紹介。中学校の授業(日韓文化交流)の中で作成した日韓でよく似た昔話の紙芝居を画像化して、小学生がパソコンソフトで色を付け、それを中学生が動画にする作業を行い、その後小学生が幼稚園で動画紙芝居を披露する実践。

②　ミニ四駆を作成する過程を生徒主体に学ばせるために「ジグソー法」を使っての実践例の紹介。生徒がミニ四駆の各パーツを学習し、その成果を統合して作成。インターネットを通じて他校と競争する実践。

③　ニージーランド語学研修に向けた**「日本紹介ムービー」**の作成紹介。**NHK クリエーティブライブラリーのコンテンツを活用し**、各自のテーマに沿った日本紹介ムービーを作成する実践。

Ⅲ　**Quizlet Live** を使った教材ゲーム体験

参加者を 3 名のグループに分けて、木村先生が作成した教材ゲームを体験しました。参加者がスマートホンから**「Quizlet Live」**にアクセスをして、木村先生から配信された教材ゲームを行いました。ゲームを楽しみながら短時間で技術(木材加工)の時間に使用する道具を覚える事ができました。

Ⅳ　インターネットモラルについて

日本の子どもたちの現状は、世界でも特異なほどスマホに依存しており、その反面 ID やパスワードの管理などセキュリティに対する認識が低いといわれます。情報モラル教育を「心を磨く領域」と「知恵を磨く領域」に分類し、発達段階に応じて指導する必要があります。児童生徒に「情報とは**何か**」ということを問題提起し、世の中に溢れる情報の**安全で有効な活用法を伝える**取り組みが必要です。

第２分科会

「美術作品から『歴史』と『今』を知る ～美術館・博物館と学校の連携～」

講師：清水　智世　氏（京都文化博物館　学芸員）
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：平岡 信之 氏（京都教育大学附属桃山小学校　教諭）

第２分科会では、「美術作品から『歴史』と『今』を知る～美術館・博物館と学校の連携～」と題して、京都文化博物館の学芸員である清水智世氏にお話しいただきました。

はじめに、美術館や博物館がどのように学校と連携しているかどうか実践例を紹介していただきました。職場体験や展覧会の企画、学校が所蔵する作品・資料の調査など、さまざまな場面で学校とつながり、博物館が身近に感じられるように取り組みをされていることが分かりました。ま

た、美術館や博物館を利用するときには、しっかりとした学習の場にするために行く目的を持つことが大切であるとお話しされていました。

美術作品は『歴史』と『今』を考えるための材料になるということを、いろいろな作品や具体的な出来事をふまえながらお話しいただき、美術作品の奥にあるものについて考える機会となりました。また、どのように教材として使えばいいのかや、どのように作品を見たらいいのかなど多くの質問にも答えていただき、新しい気づきがたくさんある実りのある分科会となりました。

第３分科会

「若手教員しゃべり場 ～現場で感じたことから～」

ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：井上 政嗣 氏（雲雀丘学園小学校教諭）
溝淵　誠太郎　氏（箕面市立萱野小学校　教諭）

第三分科会では、まず小学校と中学校・高校と分かれて、校種ごとに情報を交流しました。小学校の情報交流の中では、教師になることを前提にしている学生から出た「経験をどのように積み立てていくか」ということを中心に話をしました。公開研究会に参加するなど学生の頃からできること、教師になってから経験できること、人生経験として必要なことなど、一つの疑問をもとに話し合うことで、教師がそれぞれどのようにキャリア形成していくべきかを考える良い機会となりました。

次に参加者全体で、それぞれ考えていることを交流しました。参加者の興味は、生徒指導、働き方改革、教材研究方法、最近の子どもの興味のあるものなど多岐にわたりました。特に、授業の手立てや教材研究に youtube を使う事例を挙げた話し合いでは、問題点や利点について考え、参加者のキャリアに関わらず知見を広げることができました。また、教育現場や子どもの中での流行の中にも時代の流れがあり、情報機器に関する情報など定期的に勤務する学校の外に出て、勉強する機会の重要性を参加者で再確認することができました。

参加者が今後の教育実践に活かせるものを得ることができた、貴重な分科会であったと思います。

第４分科会

「未来社会を創造するグローバル・リーダー育成をめざして ～学校設定教科による探究学習の実践～」

講師：大前 吉史 氏（兵庫県立兵庫高等学校 主幹教諭）

ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：児玉　敏男　氏（兵庫県立尼崎高等学校　校長）

第４分科会は二十数名を超える参加者があり、次の流れで進行しました。①発表者自己紹介、②勤務校の概要、③探求学習実施にあたって、④探求学習を推進する組織、⑤学校設定科目における探求学習の取組、⑥探求学習の成果、⑦質疑応答

発表者の大前先生は現任校でスーパーグローバルハイスクール（文部科学省研究指定）推進委員長として活躍され、探求学習については前任校も含め十数年の経験があります。発表は長年の実践研究を踏まえたものであり、要所を的確に押さえた具体的な内容でした。

探求学習実施にあたっては、まずどのような人材を育てたいのかといった教育活動の核心を十分に捉え、その実現のために必要な教育活動の選定及びその教育課程上の位置づけ、連携先の構築などの丁寧な説明がありました。また、持続可能な探求学習の推進組織のあり方についての詳述な説明もありました。

学習成果として、アンケートで生徒の学習意欲の向上がみられ、進学実績の伸長、諸コンテスト等での表彰、生徒の社会貢献活動の一層の拡大などの報告がありました。

質疑応答では、各校で探求学習を実施するにあたっての留意点などを問うものが多くあり、終了時間を超える盛況ぶりでした。探求学習について緒に就いたばかりの学校も多くあると考えられますが、今回の発表が参加者の勤務校で実を結ぶものとなったことを確信した分科会となりました。

第５分科会

「困りごとを抱えている児童・生徒への支援　～支援学校・普通学級の現場から～」

講師およびｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：

上山　義宏　氏（京都市立衣笠中学校　校長）

講師：森本 晃介 氏（大阪府立豊中支援学校 教諭）

第 5 分科会では、公立中学校と特別支援学校（中等部）にそれぞれご勤務されている先生から実践をご紹介いただきました。

森本先生からは「勉強が苦手な生徒」に焦点を当てられ、効果的な３つの方法をご紹介いただきました。

１つ目は、授業の中に身体的な「動き」を取り入れることです。例えば、軽めのストレッチを取り入れ集中力を高める方法をご紹介いただきました。2 つ目は、授業の教材に「工夫」することです。生徒の興味を高めるような題材を選択し活用することの大切さを改めて学びました。3 つ目は、生徒一人一人を「生かす」ことです。「勉強が苦手な生徒」を授業の中でどのように活躍させていくか、指示の出し方や具体的な場面を想定しながら、生徒の個性に応じた授業展開を考えました。

上山先生からは、「教育の『ユニバーサルデザイン化」を目標に全校で取り組んでいる実践をハード面、ソフト面からご紹介いただきました。

ハード面からの実践として 3 つご紹介いただきました。1 つ目は、「教室環境を整える」ことです。具体的には、黒板の拭き残しや掲示物などの妨害刺激を取り除くことです。2 つ目は、使用方法を統一した「予定記入用のホワイトボードを全クラスに設置」することです。3 つ目は、枠と仕切り等を活用した「板書の構造化」です。例えば、授業内容と本時の流れを仕切るなどの活用例を紹介いただきました。

ソフト面としては、ある生徒にタブレットを持たせ活用している実践例をご報告いただきました。具体的として、カメラ機能と手書き入力を併用して授業ノートを作成しすることがありました。

お二人の実践は、困りごとを抱えている子どもたちと真摯に向き合い状況を改善していこうというもので、その姿から多くのことを学びました。参加者からは、お二人の先生の発表された実践を聞き、「明日すぐに真似できる」という声もあり好評のうちに分科会を終わりました。